文 **カーステン・ジャスナー**　写真 **トマソ・サルトリ**

アフリカのエデン

火山がつくり出す特有の景観に、世界でも多様な生物を有する
熱帯雨林。ギニア湾に浮かぶ小さな島国、サントメ・プリンシペは、
地球上で他に類を見ない希有な場所だ。サントメ島を訪れ、
暗くも心惹かれる歴史と表裏をなす、自然の美を見つめる。

［前見開きページ］
島の最高峰、サントメ山。
標高2024メートルの山頂を
目指す登山者は、しばしば霧と
雨に視界を閉ざされる。

［当見開きページ］
（下）島の北部に残る
農園領主の館のひとつ。
植民地時代の典型的な建物だ。
（左上）種苗店の黒板。

（左下）島には動植物が溢れ、
固有の植物種は130を数える。
19世紀、サントメは世界有数の
ココアの産地だった。

無言のまま、パオロは道を逸れる。山刀を2、3度振り下ろしてやぶを切り開き、奥へ分け入ると、指先ほどの大きさの果実を手に、戻ってきた。見た目はガーキン（ピクルスにする小さなキュウリ）のようで、オレンジ色の茎が付いている。彼は、それを縦に裂いて、種をこそぎ取り、四つ割にすると、一片を口に放り込んだ。その果実は、「オカミ」と呼ばれているそうだ。パオロが言うには、胃の働きを助け、消化を促進する効能があるという。害はなさそうなので、私も一口かじってみる。味はレモンに似ているが、少し苦みがある。翌日、ここから数キロ離れた場所で、私は、この自然の予防薬を口にしておいてよかったと、感謝することになる。

私たちは、世界有数の生物多様性を誇る熱帯雨林を抜けて、火山島サントメの山中を重い足取りで歩いている。サントメとその姉妹島のプリンシペは、アフリカで2番目に小さな国を形成している。大陸から250キロ離れたギニア湾に横たわるこの列島は、進化論的な意味で幸運に恵まれ、隔絶された環境にあったおかげで、この地に生息する生物たちは独自の進化を遂げた。初めて入植者が上陸したのは、約550年前のことだ。この島々は、アフリカのガラパゴスなのだ。

パオロの家族はカーボヴェルデ共和国の出身だ。彼は細身ながら筋肉質の若者で、きつく編んだ長い髪をバンダナで包み、また、指にも布を巻きつけている。土地の薬草で炎症を鎮めているのだ。彼は、子どもの頃からサントメの森を歩きまわり、地球上でここにしかいない鳥たちに夢中になった。微かに輝く青い羽毛や、ぴくりと動くオレンジ色の尾羽、深い茂みの奥からのぞく目の周りの白輪を、彼は見逃さない。この類まれな島の自然の豊かさを、パオロは私に発見させてくれる。

1泊2日の旅は、夜明けと共に始まった。私たちを乗せた車は、島の北東部に位置する首都サントメを離れ、でこぼこ道を登っていく。最初の目的地は、火山湖のラゴア・アメリアだ。標高1100メートルの地点から、バックパックを背負い、森のなかへと分け入る。外から見る森は鬱蒼としていて、とても足を踏み込めそうにない。ところが、なかに入ってみると、驚くほど広々としている。まだ若い木が多く、上へと伸びる幹は、男性の腕ほどの太さしかない。高さ15メートルから20メートルにまで育った木の幹でさえ、プロフットボール選手の太ももに及ばない。木々の間を、巧みに方向を変えながら飛びまわっていた一匹のコウモリが、急にこちらに向かってきた。ビーズのように輝く小さな目と視線が交わった次の瞬間、私はとっさに身をかわした。

太陽の光が、茂る葉の間を揺れながら、流れ落ちる滝のように射し込んでくる。地面に散った白い花が、ジャスミンのような香りを放ち、行く手に横たわる倒木の上では、私の手のひらほどもある大きな黒いチョウが、一条の光を浴びながら、ゆったりと羽を休めている。時折ちらりとのぞくのは、羽の裏に隠れている黄色い斑紋だ。

百歩ほど進むごとに、熱帯雨林の樹冠のはるか上まで伸びる巨木の板根と格闘を強いられる。パオロによれば、この木の葉や樹皮を家の炉にくべると、立ち上る煙が、妻の不貞に嫉妬する夫の心を鎮めるという。その一方で、アルコールに漬けた同じ木の樹皮をかじると性欲が増すのだそうだ。パオロはそれを信じているのだろうか。真面目な顔をして、「もちろん！」と答える彼には、今のところ必要ないと思うが、15年か20年後には必要とする日が来るのだろうか。

道は赤錆色で、滑りやすい。雨季はちょうど1週間前、5月の初めに終わったばかりだ。傾斜はきつく、曲がりくねった木の根が階段の代わりになる。優美な曲線を描く気根をくぐり、あごひげのようにもしゃもしゃと繁茂する苔をよけて進む。木の幹を這い上るランは、あと1、2ヵ月もすると、角張ったつぼみから真っ白な舌を広げることだろう。深い森のなかでは、鮮緑色の草やシダ類が目を引くが、私は、自分の頭の高さほどの、シャクナゲに似た、つやのある濃緑色の葉を茂らせたやぶに視線をさまよわせる。

森のなかでも、このあたりは快適だ。気温は20度前後で、沿岸部よりも涼しく、蒸し暑さは感じない。軽快に動くこともできるが、私はあえて休憩時間を楽しむ。靴の軋む音が消え、呼吸が落ち着くと、何も話す必要はなく、ただ耳を傾ける。木の上の方でサラサラと葉を揺らす風の音、親指ほどもある虫の羽音。密生した黄色い葉が、カチカチと軽妙な音をたてながら、優しく地面を叩く。その音色は、木琴で高音を奏でるようなコオロギの鳴き声に似てリズミカルだ。やぶの奥の方で、オナガカエデチョウが騒々しく鳴きたてている。頭上では、アフリカズキンコウライウグイスがさえずり、オニハタオリのつがいが口づけを交わしている。遠くの方からは、サントメコウライウグイスの低く太いメロディアスな鳴き声が聞こえてくる。

サントメ島には、鳥類で17、植物で130の固有種が生息している。赤道（緯度0度）と子午線（経度0度）が交差する地点からわずか数キロに位置するこの島は、何もないところから生物の生息環境がつくられ、生物が独自に進化するということを示す好例だ。約3000万年前、アフリカプレートに大きな応力がかかり、大陸をわずかに湾曲させ、引き裂き、溶岩を噴出させた。その結果、大陸の大西洋岸にそびえるカメルーン山から南西へ続く火山列が形成され、サントメを含む4つの島が生まれた。

サントメは長さ約50キロ、幅約30キロの島だ。火山性の土は肥沃で、雨水が小川をつくり、その土を山から裾野へと押し流す。風に乗って大陸から運ばれてきた植物の種子が、飛来した新参の鳥たちを育む。アフリカ大陸から適度に離れていたため、動物相や植物相の交流は限られ、サントメ島では動植物が独自の進化を遂げた。陸生動物は、島まで渡って来ることはできない。したがって、ライオンやサイ、キリン、ゾウが歩きまわる姿は見られない。わずかにオナガザルが生息しているが、これはポルトガル人が牛や豚、犬などの家畜と共に持ち込んだものだ。

サファリの「ビッグ・ファイブ」（ライオン、アフリカゾウ、バッファロー、ヒョウ、サイ）も、ここでは出る幕がない。サントメの魅力は、火山活動によって生まれた島であることに尽きる。雨風が玄武岩質のスコリ

魅惑的なジャングル（左）、ヤシが繁る水辺、鬱蒼とした多雨林、険しい山峰、活動を休止した火山群が織りなす、サントメの荘厳な風景。

ア丘を侵食し、フォノライト質の噴火口だけが、草木のなかから突き出すような形で残った。地球の奥深くから吐き出された岩が、山系に沿って堆積していき、山腹に深く刻まれた峡谷や釜状の窪地が多様な景観をつくり出した。こうして活動を停止した火山は、ふたつの気象系の境界線となる。風上に面する島の南西部が動植物には非常に蒸し暑い一方で、山を隔てた北東部一帯は乾燥し、サバンナのような気候となっている。内奥部の低地と中高度地域に広がる多雨林は緩やかに傾斜しながら、標高２０２４メートルのサントメ山の麓に立ち込める雲のなかへと消えていく。今日は、山登りはしない予定だ。経験豊富な登山者をもってしても、登頂は容易ではなく、成否は天候に左右される。高度が上がるにつれて、樹木にランなどの着生植物が密生し、森に注ぎ込む光の量が多くなる。登山者たちは、運がよければ旅の終わりに山頂から木の頂上越しに、緑の海原を望むことができるかもしれない。しかし、霧と雨のなかを歩かなければいけない確率の方が高いだろう。

火口の縁に着いて見上げると、木の幹は霧のなかに消え、パオロの言った通り木々の頂を見ることはできない。私たちは標高１４００メートルの地点にいるが、雲が頭につくほどのところに垂れ込めている。パオロの後について坂を下っていくと、霧のなかから抜け出し、開けた場所に出た。周りには、高さ1メートルほどのベゴニア（固有種のベゴニア・バッカータ）が生い茂り、ルバーブに似た白い花を咲かせている。見たこともないようなパッチ状の草地が目の前に広がっている。円形で、真っ平らで、窪みもこぶもない。

まるで湖面のようだ。実際、ここはかつてカルデラ湖で、長い時間をかけて湿地になり、草地へと姿を変えていったのだ。安全に見えるが、足を踏み入れると、火口底で衰弱していくアメリアと彼女の馬と同じ運命に陥る可能性がある。パオロが、この場所にまつわる言い伝えを語り始める。夫と激しく口論した後、ポルトガル人の植民地支配者の妻は、馬に乗って走り去った。森のなかで道に迷った彼女は、夫とその従者たちとほぼ同時に、この空き地にたどり着く。しり込みをする馬に、彼女は拍車をあて、空き地を横切ろうとする。結局、男たちは、この火口底に沈んでいく彼女をなす術もなく見守るしかなかった。

ここから先は、歩を進めるごとに、植民地時代の歴史をたどることになる。地元の人々が「折れた斧」と呼ぶ一本の木を、パオロが指さす。非常に堅い木で、植民地時代には、倒した木の幹を切り分けるのに数ヵ月を要したという。ポルトガル人はこれを、農園から海岸まで農産物を運搬する鉄道の橋や枕木として利用した。パオロと私が、幅60センチほどの細い道を難儀しながら歩いてきた場所は、手つかずの自然が残されているように見えるが、そこに舗装された広い道路や鉄道が縦横に走っていたとは、とても信じられない。

ここは二次林だと、パオロが説明してくれる。彼が教えてくれなければ、気づかなかった。この島では70年前まで、カカオとコーヒーが栽培されていた。熱

（右）開けた場所から望む、群青色の淵に流れ落ちる滝。ハイカーにとって、歩いてきてよかったと思う至福の瞬間だ。

（左）サントメは、生物多様性のホットスポット。クロカジキ、フエダイ、バショウカジキ、キハダマグロ、シイラなど230種の魚類が記録されている。

帯の植物は生育が早く、土壌の回復も早い。農園領主が、快適な木陰をつくる自生林をあえて伐採しなかった場合、原生林と二次林を見分けるのは困難だ。

朽ち木の上に立ったところで、パオロが、「ほら、そこに病院がありますよ」と言う。聞き間違えたかと思ったが、次の瞬間、粗造りの石塀がぬっと現われた。かつて病に罹った奴隷労働者が身を寄せた建物の切妻壁だ。入口まで階段が続いており、苔むした壁の大半は倒壊している。石壁の上には、屋根の代わりに、二次林に繁茂するやぶ、カポエイラから刈り取った小枝を縦横に編んだものが載せられている。アーチや柱廊のような茂みをつくるこの低木は、周辺の地域にも広く見られ、逃亡した奴隷たちに隠れ場を提供した。彼らはそこで、無害なダンスを装いつつ、武術の稽古に励んだ。このダンスは、彼らが身を隠した茂みにちなんで、カポエイラと名づけられた。

15世紀末期、ポルトガル人は、現在のアンゴラやモザンビークから奴隷をここへ連れてきた。パオロの家族の故郷であるカーボヴェルデ共和国からは、さらに多くの奴隷労働者が連れてこられたという。入植者たちは、1650年頃までサトウキビの栽培を行っていたが、ブラジルに大規模なプランテーションができると、サントメの農産物は影をひそめた。ところが、その2世紀後、彼らは再び戻ってきて、カカオやコーヒーの栽培を始めた。島の北部や東部の乾燥した低地を中心に、広大な多雨林が開墾され、約800の農園が造営された。こうしてサントメは世界有数のカカオの産地となった。当時、奴隷制度はすでに廃止されていたが、労働者は劣悪な暮らしを余儀なくされていた。約20もの病院は、純粋に医療を提供するためではなく、見せかけの人道主義を取り繕うために建てられたのだ。

私たちは、崩れかけたアーチ道の下に腰を下ろし、持ってきたツナとハーブとキャッサバのサラダを食べた。食材はすべてサントメ産だ。デザートにと、パオロがカカオの実をもいでくれる。ラグビーボールを小さくしたような実だ。彼は山刀で2、3センチの厚みで殻を剥いていく。なかには、白色の柔らかな果肉にくるまれ、ニンニクの鱗片に似た豆があった。はやる心を抑えながら、あめ玉のようにしゃぶりつき、ねばねばした白い果肉を舌で取り除く。これは美味しい。甘くて爽やかな味だ。

空がダークグレーに染まると、宿から遠く離れることはできない。若い男が走ってくる。雨が降り始める前に、収穫物を回収したいのだ。ヤシの木にロープを回し、自分の腰にも巻きつけると、花の切り口から滴る樹液を溜めたバケツめがけて、素早くよじ登っていく。収穫した樹液を発酵させると、ヤシ酒ができるのだ。

滝の横を通り、農園へ向かう土地の人々とすれ違いながら、草に覆われた石畳の道を行く。女たちがバナナやパパイヤを満載したバスケットを頭に載せて運んでいる。ひとりの女が山刀のバランスを確かめている。1975年にポルトガルから独立した後、新政府はサントメの市民に土地を分配した。現在、全市民が自分の土地を所有している。ウインドサーフィンの帆ほどもある葉を茂らすバナナや、樹高がサクラの木ほどのカカオの木に交じって、この多雨林には巨大な在来種の植物たちが生育している。鮮やかなオレンジ色の花を咲かせることから火炎木と呼ばれるデイゴもそのひとつで、心地よい日陰をつくるのが好まれ、植えられている。

その晩は、築百年という木造2階建ての荘園領主の館に泊まることになった。建物を取り巻くバルコニーに、アールヌーボーのガラス窓、床は寄せ木張りだ。館の名前である「ボムバイム」は、「よいガイド」というような意味だと、パオロが教えてくれた。

午後6時。太陽はすでに沈み、外は真っ暗だ。私は、ベランダに出て寝そべり、夜空を見上げる。誰かがラインストーンを袋ごとぶちまけたようだ。明日は、鮮やかな色で塗られた木造の小屋が散在する山村をいくつも経て、首都へ戻らなければならない。通りしなに、村の男がヤシのジュースをすすめてくるだろう。乳白色の液体が注がれるカップは決して清潔とはいえない。でも、好奇心には抗えない。だが、私はパオロが予防のため与えてくれた、消化を助けるというあのオカミの果実のことを思い出していた。ジュースの甘酸っぱさを味わうだけで、それ以上のことにはならないだろう。小さな知識に感謝だ。

厳かで美しいものを目の当たりにした時には、何か高尚なことを考えるべきなのだろうか。それとも、このちっぽけな惑星の熱帯の緑の純粋な美や、何も育たず、このような楽園もないであろう天上の果てしない広さにただ圧倒されているべきなのか。私は思いをめぐらせる。✥

「パテック フィリップ マガジン・エクストラ」（patek.com/owners）にて、この記事の特別関連コンテンツをご覧いただけます。

ウィンドサーフィンの帆ほどもある葉を茂らすバナナなどに交じって、この多雨林には、巨大な在来種の植物たちが生育している。